

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名 ふるかわ 古川 ゆか 裕佳

本論文は志賀直哉の中期（1917～1937年）の作品を中心に、作中の女性の自律的な役割に注目することによって、これまで男性原理の典型的な体现者であると目されてきたこの作家の見直しを行うと共に、単なる「私小説」にとどまらぬ方法意識、あるいはまた、同時代の文壇との生きた応答関係を明らかにすることをめざしたものである。

第一、二章では近代小説における「女中」像が、男性主人公の内面を形成していく上で重要な役割を果たしている点に注目し、「佐々木の場合」を初めとする志賀の作品群において、「女中」の存在が一見自明のものと思われていた家庭のイデオロギーを攪乱していく様相を導き出している。

第三章では「焚火」を対象に、「心境小説」というジャンルが生成される過程でこの作品の果たした役割を検証している。その上で、従来作者の事実を随筆風に描いたものと見なされていたこの短篇が、「話」をいかに創り上げるかという独自のモチーフを内在させていること、またそこに同時代の芥川龍之介の問題意識との接点が見出せる事実を指摘している。

第四章では、「暗夜行路」が二十年近くに及ぶ発表の過程で大きくその性格を変容させていった過程を検証している。すなわち、時代的な苦悩と、不義にまつわる運命悲劇という異なる二つの受容が並立する中で、次第に調和的な自己完成に向けて連載が進み、さらに結末でこうした枠組みまでもが自壊し、対等な男女の「恋愛」が現出するに至る、という分析は、作者の意図と読者の期待との相互関係の中で小説が生成されていく過程を時間的に明らかにした試みとして注目されるものである。

第五、六章においては、「邦子」において自殺する「妻」の、その言葉の持つ批評的機能に着目し、これが主人公、ひいては同時代の芸術至上主義的な価値観を相対化していく構造を指摘している。また、「菰野」の分析においては、何が書けないかを書くことによって物語と小説家との関係を表現していく、この作品独自の構成に注意を促している。

志賀の文学の総体を論じるには今後さらにより多くの作品を対象にしていく必要があるが、志賀直哉が自ら描く女性像によって絶えざる自己相対化を試み、その上で「私小説」という通念にとどまらぬ、さまざまな方法を駆使していた事実を明らかにし得た点は高い評価に値する。

以上の点から、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。